

海へのことば

大正十二年

百年前の関東大震災の年である。日本が日露戦争を終え、韓国併合を行い近代化の途中にあつたその時に起こつた。僕はこの状況の中でいろんな文学者たちがどんな観察と感想を持ちどんな行動をしたかに興味を持った。沢山の文章を残しているがすべては網羅できない。田山花袋、横光利一、志賀直哉、寺田寅彦……。

震災の前年に森鴎外が亡くなり、六月には有島武郎が軽井沢で情死し七月「余談」だが、この海三十号が発刊された七月に腐乱死体で発見された事件は僕の中では大正という社会情勢から見てきり離せない。またあるいは渋沢栄一が、奢り高ぶつた人間への天罰だ、と叫んだのも世相の一つだろうか。

堀辰雄は避難で隅田川の河畔に逃げたが、母親とはぐれ亡くしてしまふ。泳ぎ回つて探すが見つからず、彼自身も肋膜炎になる。室生犀星がそれを詳しく書いている。谷崎潤一郎は箱根にいてその後怖くなつて大阪へ移住する。そして十年後に東京はヨーロッパのような煌びやかな都会に変身するだろうと述べている。

芥川龍之介は田端の高台に住んでいた。故郷が破壊されたという感傷はなく震災の東京を冷静な目で見て回る。しかし冷静な割には第三国人が暴動を起しているのではないかと噂を信じ、否定する菊池寛と口論をしたりする。

芥川が自殺した時、川端康成は、彼が自殺しようとした時に目に浮かんたのは、震災で焼けこげた無惨な屍体だつたのではないかと書いている。

川端康成は震災後しばらくして、震災前とその後の復旧の浅草を新聞に連載したらしいが、僕は読んでいない。

僕は何年前だったか、ある皇族の老婆と話したことがある。逃げてきた韓国人の青年を、彼も皇族だったが、自分の部屋の押し入れに長い間置つて生活の面倒を見た。

またフランスの駐日大使だつたポール・クロードルは野営しながら、その中でも日本人たちはおとなしくじつと耐えている、と書いた……。

僕は震災の二週間後に虐殺された大杉栄に興味を持つていくつか作品を書いた。以下略 井本元義

【『詩と眞實』より抜粋】